

67-424



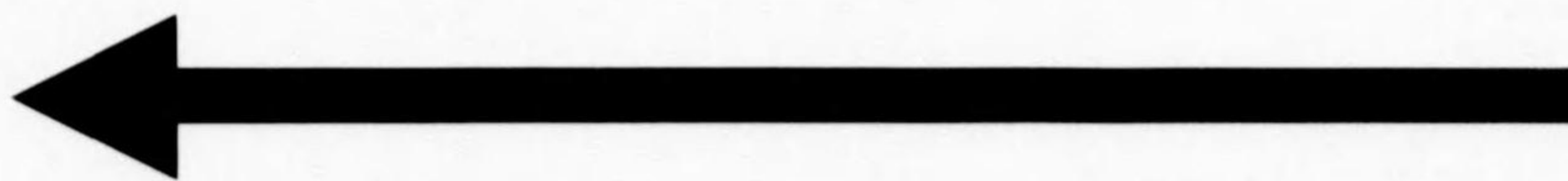
1200501281623

67

424

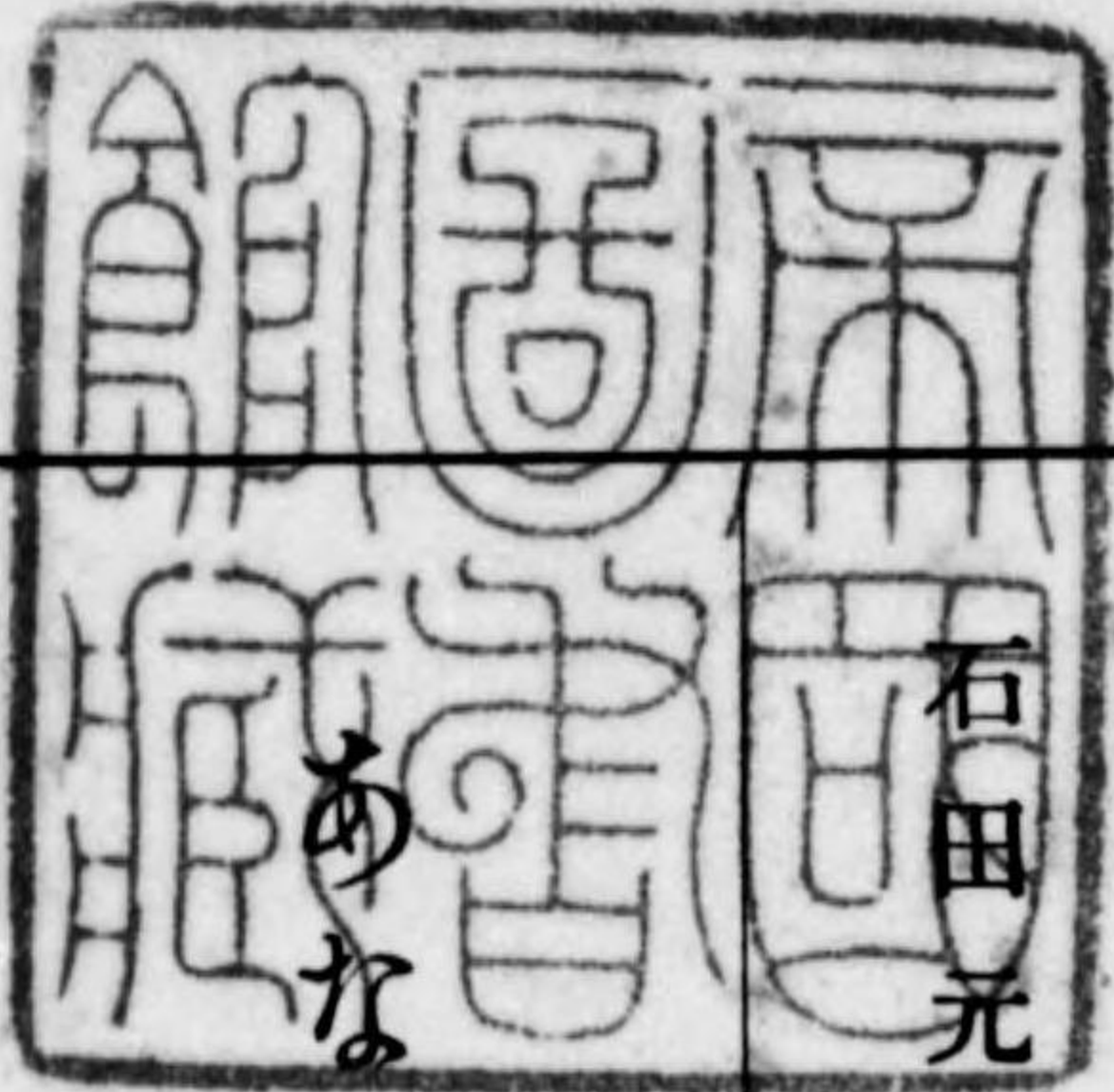


始



あぶら せうせう 一巻

5L-19



石田元季先生著

あなただけの茶

信
道
會
館
版



67-424

序

一茶の句に於て、私どもは凡夫の姿を見、野の人の聲を聞く、それは俳諧史上注意すべき傾向を示したものである。そして、それが注意すべき近代的傾向を示したものであると共に、私どもは人間一茶のいたましさを思ひ、そのいたましい笑ひを通して、私どもに取りてよそ事ならぬ感動に打たれざるを得ない。そして、そのよそ事ならぬ感動に打たれると共に、その苦しみと惱みとが、やがてかすかな微笑となり、かすかな微笑が輝かしい感謝となり來つたところに、「あなた任せ」の尊い心境を見出して、唯ありがたく合掌せざるを得ないのである。俳人一茶も注意すべきであり、人間一茶



も検討すべきであるが、こゝには「あなた任せの一茶」を寂光のうち
に認めようとしたのである。

私がこの題目の下に、いさゝかの講演を信道會館に於て試みた
のは、昭和九年十月二十一日であつた。その講演に若干の補訂を
加へ、一茶一代の句に就いてその尤を抜き、その人を見、境遇を察し、
心境を窺ひ、作風を知り得べき一句集を編して附録とし、加ふるに
會館の襲藏に係る一茶の墨蹟を以てし、これを刊行するに至つた
ものが即ち本書であつて、その世に出づるは全く信道會館の盛圖
による。こゝに本書上梓の由來を叙して衷心の感謝を表す。

昭和十年六月十六日

石田元季しるす

我國は草もさくらを咲にけり
一茶坊

非園の草とちくとを知りたり

一茶世



花をめて月に

かなしむは雲

の上人のことにして

俳諧寺入道前彌太郎

小林一茶

おらが世やそこの草も

もちになる

あまのなる

まよひ世字まよひの草

の土人のこころ

あまのなる

あまのなる

小林一茶

将監寺入道前藏大猷

あまのなる

あまのなる

あまのなる

あまのなる

あまのなる

俳諧入道前藏大猷

小林一茶

東御門迹
まれの下向に
木々もめを
開くや
みたの本願寺
一茶坊

一茶也

寺廟の本の心

字

字もも

二向の字

窓門の東

一茶也

寺廟の本の心

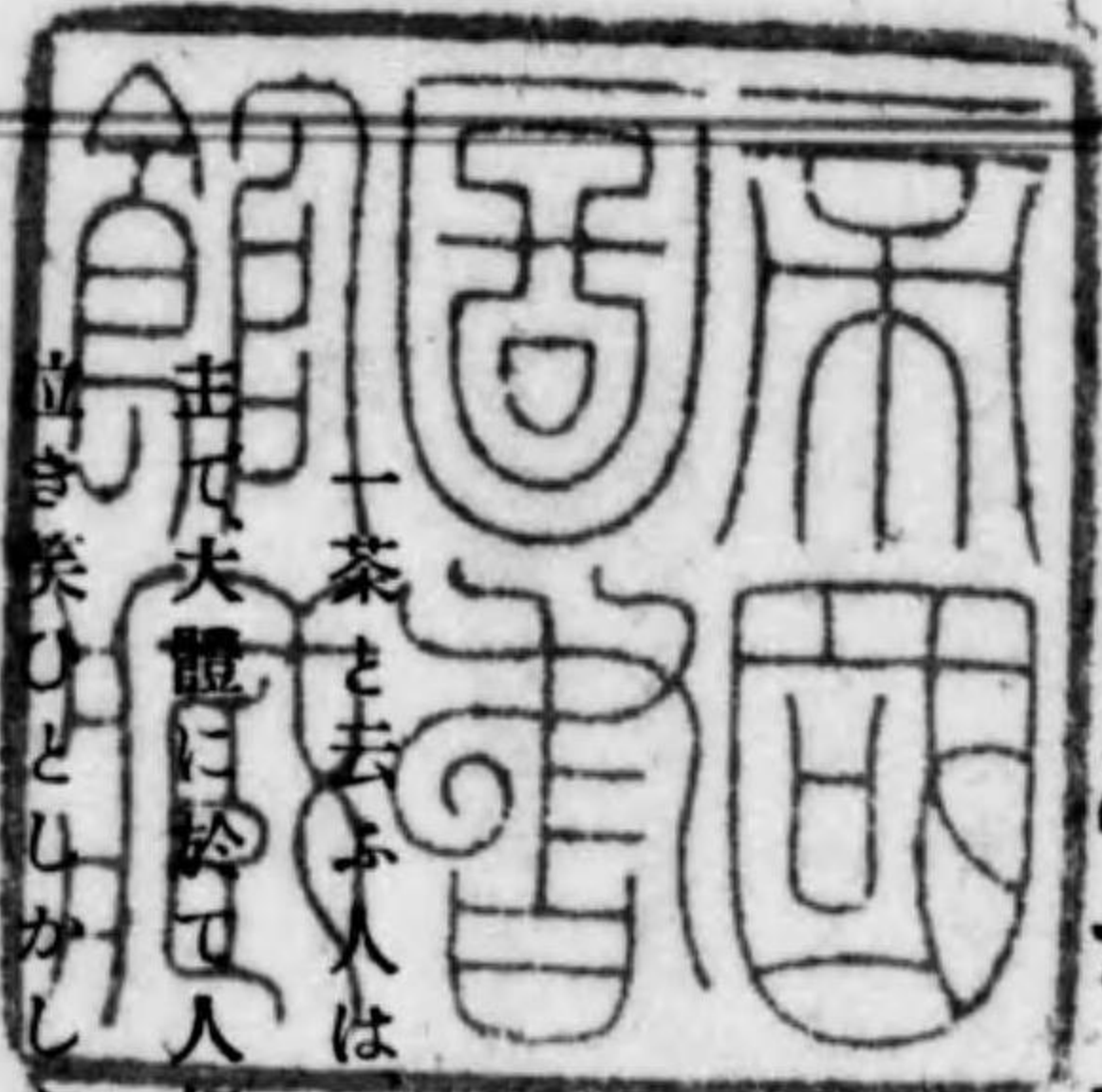
字

字もも

東門の窓

あなたまかせの一茶

石田元季先生述



一茶と去ふ人は「繼子の一茶」と自分でも言つて居た通り、僻んだ性質の持
者、夫體に於て人好きのしない人でありました。そして、笑つても苦笑ひと
も、さき笑ひとひかしなないと云ふやうな人でございました。彼は、しかし非常に
苦しみに苦しみました揚句、晩年には、

ともかくもあなた任せのとしのくれ

の「あなた任せ」に眞の微笑を見せたのであります。「ともかくも」と云ふ

二
のは、どうなるか知れない、私共のやうな淺薄な凡夫ではそれはわからない、私
がどうなるか………そんなことは一切わからないが、兎に角、このまゝに投げ
出してと云ふ心持です。この「ともかくも」と云ふのは、矢張り信心のあらは
れた言葉であります。「ともかくも」と云ふところが大變に有難い、まあ何ん
にしてもと云ふのでございます。どうなるか私共の智慧ではわかりません
が、ともかくもあなた任せのとしのくれ、今年も暮れて、來年はどう云ふ風にな
るか知れぬが、ともかくも、あなた任せて自分は安心して暮して行きますと云
ふので、こゝ迄ひがみ根性の者が來た道をお話致したい。

一茶と云ふ人は、いま申しますやうに、いろ／＼と苦しみに苦しんで居た人
でございますから、かう云ふ苦しみをして居る人が到達した境地が、洵に床し
く懐しいのでございます。この「ともかくも」と云ふのは、末はどうならうと

もその時々都合次第である、目の前さへ好ければ宜い、爲たい放題の事をし
ようと云ふのではありません。それでは狡いことや横着のやり放題、野とな
つても山となつても先の方は構はぬといふ無鐵砲になります。佛意に任せ
て私の才覺を立てない意味の善い無分別は尊いのでありますが、無鐵砲は勝
手氣儘であります。「あなた任せ」と云ふこと、「勝手」と云ふこと、は無論
違ひます。そして、本當に「あなた任せ」の出来る人間は、決して「勝手」が出来
ないのであります。「あなた任せ」の境地に居れば「勝手」は出来ないことに
なつて居ますが、なぜ「勝手」が出来ないのであるか、と云ふ事は、これから追々
申上げて行く譯でございます。

私は苦しんだ人間として、一茶の一生をなつかしく思ふのでございます。
尤も、一茶は俳人でありましたが、俳句と云ふものは、勿論たゞ文字を列べて冗

談を言ふので御座いません。本當の心の底から出たものでなければならぬので御座いますから、一茶が俳句を作つたと云ふことは本當に彼はそれを心の糧とし、それで慰められたので、その點をいたはしく、また、床しいと私共は思ふのでございます。

一茶の故郷は、北信濃の水内郡の柏原と云ふ所であります。この柏原などは、日本海の荒い風が越後平野を吹き捲つて信濃平野に来る入口で、一茶が多年放浪の後、國に歸る事になつて、「これがまあつひの住處か雪五尺」と申しましたが、眞にその通り、非常に雪が多くて、冬になると列車が立往生をしますから、炊出しなどをして青年團が救援に出掛けると云ふ位の所で、斯様な事が新

聞にもよく出て居ります。私が參つたのは八月で、その時は温泉巡りをしたので、私は上林に居りまして、上林から出かけて行つたのでございます。柏原では一茶のお墓詣りもいたしましたし、また一茶の使つてゐた鐵瓶で沸かした湯で、お茶をよんで頂いたり致しました。その土地で一茶の坐像を頒つて居りましたので、それを私は買つて來ようと思ひましたが、何分壞れ易く、それに荷物が多いものですから、その時は買ふことを止めました。しかし丁度その邊から私の勤めてゐました學校に來て居る學生もあり、冬になればスキーなどに行く人もありますから、その人に頼めば好いと思つてゐました。それからその事を頼みますと、誰でも心易く承知して下さるに拘はらず、些つとも買つて來て下さらないので、どう云ふ譯かと思ふと、雪のため駄目なのでございました。さういふ雪の柏原でございます。

一茶はその雪五尺の柏原で、今から約二百年前の寶曆十三年五月五日に生れ、通稱を小林彌太郎と申しました。父は彌五兵衛と云つた人であります。この家は中産のちよつと低いやうな農家で、自作農をやりました暇には駄馬を曳いて荷物を運んだりするやうなことをして、生活をして居りました。また、一茶のお母さんは、即ち彌五兵衛の細君は、同村字二の倉の庄屋宮澤家から来た人で、通稱をくにと云つた人でございます。ところが、この實母は彌太郎（二茶）が三歳の秋に死んで了ひました。一茶が五、六歳の頃、この彌太郎が門の所に立つて居りますと、「親無し子く」と言つて、皆が悪口を言ふ。「親のない子はどこでも知れる、爪をくはへて門に立つ」とひやかされたものであります。一茶が老年になりましたから當時の事を思ひ出し、「我身ながらも哀れなりけり」と書いて居りますが、本當に憐れむべきみじめな少年時代であつたと、つ

くく、想ひ出したのでせう。家にはなほかなと云ふお祖母さんが居りました。母親なき彼を餘りにいたはりましたので、それがつひ彼の我儘を増長させる事になつたかも知れません。ところが八歳の時に父は後妻を迎へました。この人はさつと云ふ名で、この時二十七歳、矢張り柏原近傍の倉井村から嫁入つて来たのであります。その人が嫁入つて来た翌々年に、弟の仙六と云ふのが生れました。この頃まで一茶は柏原の本陣中村氏といふ方へ手習稽古に通つてゐましたが、異母弟が生れてからはそれも止めさせられ、日々守りをすることになりました。この時分から、何かにつけて一茶の小さい胸は痛みました。

またむだに口あく鳥のまゝ子哉

これ等の句はずつと後の作であります。斯様な心持は、この頃に養はれた

ものでありませう。弟の子守をする、さうすると、弟が小便をかけた、或は髪の毛を掴んだり致します。ですから、それを堪へて守をして居りましても、時々腹が立つからお尻をつめつたりもしたてせう。弟が泣き出すと、お母さんから、「お前は、苛めて泣かせる」と悪く言はれる。それで、私は悪くないが、お母さんは私ばかり叱つて、小便をかけた者の方は何んとも言はれぬ、こんな馬鹿なことはないと思ふ。家の者が皆んな田へ行き、お祖母さん迄農事の手傳ひに出て行つたやうな時には、自分一人留守番をして居るが、藁なんか積んである小屋に坐つて、一日中ちゃんとして居る。門へ出ると友達が、「親のないう子は……」と言つてひやかしますから、自分は獨りて居る方がいゝと思つて、さう云ふ所に朝から晩迄坐つて居たのでせう。すると、そこへ雀の親が虫か何かくはへて来て、子雀の可愛い口に入れてやる。其側に親無しの子雀が

口を開いて待つて居るが、一向、自分の所へは入れて呉れぬから、變な顔をして首を振つて見て居る。また持つて来る。今度も口を開いて居るが、結局、自分の口へはちつとも入れて呉れぬ。「又むだに口あく鳥のまゝ、子哉」などの句にあらはれた悲しい感じは、その頃斯様なことを目睹して、痛烈に自己の境遇を自ら憐れんだ回想から來たのかも知れない。こんな句はこれ一つでなく、まだ幾らもこれに似たものがございますが、兎に角、一茶は氣の毒にも益々いじけてしまひました。かう云ふ場合に於ては、どちらも必ずしも悪いとは申されません。繼母の方でも、何もそんなに一茶を憎まうと思つて嫁つて來たのではないし、また一茶にした所で、何も無暗に繼母に反抗しようとしたのではありません。どちらも悪い所があると言へばさうも言ひ得ようが、又どちらも悪くないと言へば悪くないので、唯雙方が寄り合へばさういふ風になるので

あります。犬と猿とは昔から喧嘩するものと云はれて居りますが、動物園などでは、犬と猿とが仲好くお友達になつて居るのを見ることがあります。愛したくて愛し得ない悩み、愛されたくて愛されない苦しみ、そこには一つのこだわりがあるからでございます。自分が不可ないと氣附いた時、もう堪忍して呉れ、と云はうとしても、その「か」と云ふ聲が咽喉まで出て来た所で、こだわりがあつては口へは出て来ません。唯一言謝辭をいへば好い場合でも、それが出ないから事態が愈々悪化します。そのこだわりは、今繼子繼母の場合を申して居りますが、併し、繼子繼母の場合ばかりでなく、舅姑と嫁との間でも總て皆さうであります。言へない爲めにこだわりが起ります。これは主人と家事手傳人との間でもさう、お友達の間でもさうでございます。大きい事で申しますと、國と國とが對立した時でも、さういふ事が往々ございます。眞心を

打明けて言へばいゝのに、言はないため誤解が起ると云ふ風の事が尠くはございません。

そんな譯で、家庭にとかく暗雲が低迷しますので、十四歳の時に一茶は江戸へ修業に出されたのでございます。その時のことを後年一茶は、『父の終焉日記』の中に「十四歳の春の曉、しほくと家を出てし時、父は牟禮驛名まで送りたまひ、毒なる物はたうべなよ、人にあしざまに思はれなよ、とみに歸りてすこやかなる顔をふたゝび見せよやとて、いとねもごろなる言の葉に、思はず泪うるみしが、未練の心ばし起りなば、連れなる人に笑はれん、父に弱き足を見せじと無理に歩みて、別れけり」と書いて居ります。お父さんが送つて呉れて別れる

時、お父さんは泣いて居る、自分も十四歳の子供ですから、洵に悲しいが無理に附元氣を出して、「行つて來ます」と言つて別れたと云ふので、それから一茶は家を離れて江戸へ出ましたが、江戸で何をしてゐたか、それははつきりと致しません。修業奉公をしてゐたと想はれますが、詳しいことはわかりません。一茶は負けず嫌ひですから、この時代の艱難辛苦を書かなかつたのでせう。それに思ひ出しても厭やだつたからでせう。他のことはいろいろ書いて居るが、そのことは書いて居りません。或時は酒屋の樽拾ひをやつたり、或時は塾のやうな所で學僕になつたやうなこともあるらしいと申しますが、しつかりわかりません。兎に角、非常な辛苦艱難を江戸では嘗めたらしいのでございます。

併し、その時分から、一茶は俳諧が好きでありました。それはどうして俳諧

が好きになつたかと申しますと、故郷の柏原に住まつてゐた頃に、各地に大名の宿をする本陣と云ふのがございますが、その本陣の中村六左衛門と云ふ家に行つて、前にも一寸述べました通り、讀書手習を授かりました。その中村と云ふ人が俳諧を好んで俳名を新甫といひ、その家に肥前の人で若翁と云ふ名高い俳人が寄寓してゐました。そんなことから、その村でも俳句が流行りまして、それから一茶のお祖父さんも少しは俳句を作り、彌五兵衛と云ふお父さんも俳句を作りました。田舎の俳人で餘り上手ではないが、その道の數寄者です。それで一茶も、極く子供の時分から感化を受けました。一茶は多情多感の人で、頭がいゝと云ふことゝ、頭が鋭いと云ふことゝ、はちよつと違ふやうでございますが、兎に角一茶の頭は敏感の方で、頭が聰明だと云ふのとは違ふかも知れませんが、至極敏感の人でありましたから、なか／＼俳諧と云ふ方面

ては、認めらるべき才能を初めから有つてゐたやうでございます。

それから、いろいろ、辛苦艱難をして居るうちに、俳諧を正式に稽古を致しましたのは、江戸で二六庵竹阿と云ふ人の所にお弟子入したことに始まります。どうしてお弟子入したかは知れませんが、兎に角、この人の所にお弟子入したのが、正式に俳諧に入つた初めらしいのでございます。江戸に葛飾風と云ふ俳諧の一派がありますが、二六庵竹阿はその系統に屬します。一茶は天明七年（彼の二十五歳の時）に『白砂人集』と云ふ俳諧の傳書を寫しまして、それに署名して居りますが、その頃には、圀橋いけはしと云ふ號を用ひて居りました。それから間もなく寛政二年に竹阿と云ふ師匠が死んだので、その頃、一茶は餘程認められてゐたとみえて、その後をついだのでございます。一茶は負けず嫌ひでありますから、宗匠と云ふやうなことに丁度向いて居ります。で、宗匠として自

分はやつて行かうと考へて、その後をついだのでございますが、其頃のいはゆる宗匠では一茶の氣分に合はない事も多かつたでせう。間もなくそこを出まして、寛政三年二十九歳の時に久々郷里の柏原へ歸つてみましたが、どうも矢張り繼母との間が面白くありません。今度繼母に會つたら機嫌のいゝ顔をしてみよう、さうしたら、あちらの心も和らぐだらうと考へ、今度こそは——と打解けた態度で行きますが、繼母と顔を見合せると、氷より冷めたものに觸れるのでございました。それで、翌年（寛政四年）になると、彼は長い旅路に出ました。まあ日本國中を巡つて草鞋錢を貰つて歩くと云ふか、へほ、宗匠の行脚と云ふやうな風で出て行きましたが、その三十歳の時から、一茶と云ふ名前を附けたのでございます。

一茶は本願寺の門徒でございますから京都に参りまして父が詣りたいと非常に申して居りつゝ果さなかつた親鸞聖人の遺蹟に参詣しまして、もう私も俳人として一生を送ります、この俗世間とは一切絶ちますと云ふわけで、本願寺でおかみそりを頂いたのでございます。それが寛政四年の春でございます。

春立つや彌太郎改め一茶坊

と云ふ句を作つて居ります。その年から一茶坊となつたのでございます。さうして、その時分から一茶は、一茶式の俳句を作るやうになりました。一茶式と申しますのは、まあ滑稽であります。滑稽の句は一茶に及ぶものがないと正岡子規も言つて居りますが、彼獨特の滑稽です。それは唯をかしい事を言つて笑はせると云ふのが詮でなく、心の中には憂ひと悲しみが満ちて居る

その中に笑ふ、笑つて苦惱を茶にしてしまふ、さう云つたやうな笑ひ方で、そこに獨特な句風があらはれたのでございます。例へば、

陽炎や手に下駄はいて善光寺

手に下駄穿いてと云ふのは滑稽です。足に穿くべき下駄を手に穿いて、さうして善光寺の山門か、そこら邊に、春先ですから乞食のやうなものが澤山居るのを見て、手に下駄はいて、と滑稽に言つて居りますが、一茶はそのゐざりを見て、あの人はどこの人だらう、四國の人だらうか、九州の人だらうか、汽車汽船の無い時ですから、手に下駄穿いて、かうして何百里の道を、足の所を菰でいはいへて貰つて、旅から旅を續けて善光寺迄来たのは氣の毒である、と思つたに違ひない。胸には札など附けて、どこくの生れであるとか、誰にも皆死別れたとか、或は不治の病氣に罹つたとか、いろいろさう云ふやうなことがそれに書い

てあるのが目に着く、それで善光寺へ来たのである。病氣が治したいとが、何か信心ごとの爲めに、手に下駄穿いて来たのだと思ふと、善光寺平に陽炎の立つ春でございませうから、花も咲くのに蝶も舞ふのに、人も遊ぶのに、手に下駄を穿いてゐる、あ、何んと云ふ氣の毒な人であらう、と本當に一茶は、さう云ふ氣の毒な人に對して萬斛の涙を注ぐのであります。ゐざりてこそ無けれ、血を吐く思ひの自分の身の上に引當て、泣くのでございませう。「陽炎や手に下駄はいて善光寺」など、申せばちよつとみると笑つて居るやうですが、心の中では熱い涙がにえくりかへる。餘りに悲しいからぎりぎりの淺ましさをそのまゝ、言葉にあらはして、現實を暴露し痛い所にメスを當て、居るのでございませう。しかし、幾ら悲しい、苦しいと云ふ言葉で言つても盡きないから、一たびそれを放下して、或る意味での茶にしてあらはす、さう云ふ句風になつたので

ございませう。それで「一茶」と云つたのでせう。苦しみも悲しみも一盃の茶味に放下して了ふと云ふのが一茶です。彼は二六庵竹阿に師事したもので、其系統は葛飾風で、彼の伸ばしたい羽翼も流風に拘束せられるし、俗宗匠の態度を或る程度以上に執ることに、性格的な不満があり、旁々いさぎよくその束縛を離れまして、善かれ悪しかれ、自分独自の句境を拓かうとしたのであります。彼は茶杓のやうな華押を書いて居りますが、あれは矢張り茶杓でございませう。一茶と云ふ人は、猶介不羈で、餘り他の人を尊ばないやうな人でありました。けれども、江戸の成美と云ふ俳人などに對しては心から尊敬して居りました。この成美と云ふ人は、もとより業俳ではありません。江戸で名ある淺草藏前の札差井筒屋の主人でございませうが、脚の病氣リュウマチスのひどいので、躰のやうな風でしたが、人格者であり、一面うんと勉強して財産を殖や

し、日蓮宗の信者であつて、お寺の爲めに盡したり、哀れな人を助けたりして、義心の深い人でありました。江戸ッ子の中にも、本當の江戸ッ子は、遠慮深くて腰が低く、洵に奥床しい。成美はこの方の江戸ッ子で、淡泊で氣が低く、几帳面で、人づきあひのいゝ人です。それで如何な一茶も、他の人は嫌ひでも、成美だけは好きでしたから、作句の批評をして貰ふと云ふ風でございました。その成美が一茶の撰集『三韓人』(文化十一年)の序に、「森羅萬象を一盃の茶に放下し、自ら一茶となのりて」と書いて居ります。その森羅萬象あらゆるものを己が喫茶一味の中に融化して、了ふと云ふ、そんな意味で一茶坊と云ふ名を附けまして、さうして行脚を始めたのでございます。

彼は、それから西國行脚に赴きまして、西國をすつと巡り、四年の後に江戸に歸りまして、俳句の宗匠として江戸で立つと云ふことになりました。餘り金

は儲からぬが、兎に角、彼は宗匠として立つことになりました。それからでも江戸に住まつて居りまして、今度は餘り遠方に出ないまでも、安房、上總、下總、甲斐、或は北陸地方に行脚し、到る所で句を書いたり、他の句などを見てやつて、それによつて生活を立て、ゐました。この一茶には、洵にふさはしい暮し方でございます。

ところが、三十九歳の時になりました、即ち宗匠になりましたから十年程経つて、父が亡くなつたのでございます。親思ひでございませうから、一茶は慌ただしく江戸から歸りまして、父の看護を致しました。その時のことを、『父の終焉日記』に詳しく書いて居ります。矢張り繼母とは不和です。それで、家の

三三
繼母と云ふ人は冷酷である、仙六と自分とは性分が合はない、と云ふやうなことが頻りに書いてあります。例へばお医者さんが出て来て、お父さんは餘程大病だから酒を飲ましてはいけな、と言つて酒を禁める。すると一茶はその後で、今度の病氣は醫者が迎もむつかしいと言ふ、さう云ふ病人なら本人が酒を飲みたがつてせがむのだから、少しは飲ませてあげたらよからう、と云ふと、繼母と弟の仙六はお医者さんがいけな、と云ふ以上、絶対に飲ませてはならない、と云つて跳ねつける。どうせ死ぬものなら飲ませたらいい、ではないかと一茶の云ふのも一面では尤もであるが、繼母と仙六が飲ませてはいけな、と云ふのも一面の道理である。これはよく話合へばわかる事であるが、そこにこだはりがあつて、そこから喧嘩が始まるのであります。一茶は純真ですから、ごまかしたり嘘の言へない人で、ごまかしたり嘘の言へる人だと妥協

も出来ませんが、さうでないから、餘計に喧嘩するわけでありませう。一茶は長男であります爲め、お父さんの側に附いて居つて、體をさすつたりして居る。さうして仙六が藥を醫者の所へ貰ひに行くと、繼母が見てゐて、仙六が氣の毒だ、弟が邪魔になるから、弟ばかり藥を取りにやり、自分は一寸もお父さんの側を離れぬやうにして、死んだ後の分け前などに就てこそくと話をすると、そんな風に誤解して、喧嘩をします。さう云ふ鹽梅に誤解が始まると、事毎に衝突しなければならぬのであります。痰が出ていけないから砂糖が欲しいと、父が云ふ、それで砂糖を持つて行くと、父がそれを嘗めて、「お前も嘗めたらどうだ」と云つて一茶に小匙ですくつてやつた。それを繼母がちつと見てゐて、「砂糖なんかもう買はなくてもいい、彌太郎が嘗めて了ふから」と云ふ風で、お父さんが嘗めたいと云ふ砂糖位儉約しなくてもいい、のでありますがお父さんが

三三

彌太郎に、「お前も嘗めたらどうか」と云つたのに腹を立て、さう云ふ風なことを云ひます。他の人にならそんなことはない、他所の子供が遊びに来たら匙にすくつてやるお母さんでありますが、一茶が嘗めたら堪らなく腹が立つのです。芭蕉の句に、「よく見れば薺花なづなさく垣根かな」といふのがございますが、よく見ればさゝやかな薺の花の美しさがよくわかります。よく見なければ唯つまらない草に過ぎないやうですが、よく見ればその美しさが判つて來ます。一茶とその繼母や仙六の間でもその通りで、お互によく見守りよく理解すれば、總てが判つて參り、そこに感謝する心と自ら謙る心と他を許す心とがあれば、何の衝突がございませう。

一茶と繼母の間も、さう云ふ風にして始終喧嘩をしてばかり居りましたが、たうどうお父さんは、それが死病でありまして、六十九歳を一期として歿して

了つたのでございます。亡くなつたのは、享和元年五月二十一日でありました。

おさらばぞ仲よく致せ門すゞみ

の一句は、そのお父さんの遺吟でございました。もう私は居らぬやうになるが、喧嘩などせず仲好く暮せよ、と言つて皆を諭したのでございます。父の歿後まづい顔を見て居つても面白くないから、それから間もなく一茶は江戸へ戻りました。折々は墓參の爲めに郷里へ歸りましても、五十里の道を歩いて來て、草鞋の紐も解かずに、江戸へ戻ると云ふ風でありました。それは繼母はじめ、あれは家の遺産のことて來たのだらうなど、考へて、頭の先から足の先迄ジロ／＼と眺める、もう一茶は厭でならない。茶を飲むのも厭である。故郷と云ふ所は、よるもさはるも、不愉快なことばかりであると、

ふるさとはよるもさはるもばらの花
 の句を作りました。繼母は素より冷酷親類へ寄つてもどこへ寄つてもさう
 だと思ふ所に故郷を愛し乍らもそこにこだはりを生じて彼は非常に苛々い
 たしました。

故郷は蠅まで人をさしにけり

故郷やちかよるものを切るすゝき

故郷は寒さもいこぢわるきかな

雪の日やふるさと人のぶあしらひ

もうあらゆることを言つて、故郷を悪く云つて居ります。さう云ふ風です
 が、江戸ではさうでもありません。尤も人づきあひが滑らかな方では決して
 ありませんが、また友達が無い譯ではございません。就中、成美との間柄は前

にも述べたやうに親しいものがございました。一茶は江戸では、谷中の本行
 寺や本所五ツ目の愛宕山別當の明き堂などを借り、また深川の方にも居つた
 ことがあります。常に孤獨的な貧しい生活をして居たのでございます。

夕燕われにはあすのあてもなし

燕には拾つて来る餌があるが、俺はあすの食物のあてもない。

柴栗のゑむといふ日もなかりけり

栗はゑみわれる日もあるが、俺にはニッコと笑む日がない。

わが春や炭團一つに小菜一把

俺は春を迎へるのに、炭團一つに菜ツ葉一把と云ふ、さう云ふ貧しい春を迎
 へると云ふので、これは文化六年の句であります。その貧しさと佗しさの程
 がこれ等の句で窺はれます。

故郷に歸れば、彼には父の遺産があるが、その遺産處分て弟と度々衝突をしたのでございます。村名主等の仲裁が這入つて取極一札が出来、文化五年に漸く配分を定め其冬押詰つて江戸へ還りましたが、それでもまだ紛紜が絶えなかつたのでございます。この頃に故郷を憎む句が多く作られました。一茶は、この上は公儀へ訴訟をすると云ふことになつた。ところが、柏原の明専寺の住職が驚いてこれを止めました。さうして結局得米代金家賃等の勘定高金十一兩餘を仙六から一茶が受取つて、熟談書附(文化十酉正月附)を認め、それてまづ和解いたしました。

斯様にしてまた一旦江戸に引返し、續いて故郷に一家の主として歸住する

こと、なり、文化十一年、一茶は五十二歳ではじめて嫁を貰ひましたが、晩婚と申しても、これ位晩婚の人はない。一茶は幼少から具さに辛酸を嘗め、五十歳に近い頃、頭髮既に白く齒牙悉く脱けたといふ。しかし幸にも夫婦仲は至つて宜い方でありました。一茶は多年日記を付けて居り、細かにいろ／＼の事が書いてあります。女房を貰つて非常に仲好くして居るやうなことが日記の中に書いてあるので、それを見て笑ふ人もありますが、併し、彼が五十二歳にもなつてはじめて妻を持つて家庭を形づくつたのですから、どんなにか喜んだことであらうと同情に堪へないのであります。妻は柏原から一里許り離れた所の野尻の人で、常田氏きくと云ふ名で、年は二十八歳でありました。結婚後も一茶は時々江戸へ上りました。文化十一年の冬江戸の俳壇を退いて故郷に還る披露の折は、さすがに成美の肝煎でその行を壯んにせられました。

やがて二人の間に子供が出来ましたが、男子兩名夭死し、文政元年一茶五十六歳の時に女子さと女が生まれました。一茶はそれを非常に可愛がつて、翌二年の新年には、今年からお雑煮の膳が三つになつたと言つて喜びました。「おらが春」のうちに、「この五月生れたる娘に、一人前の雑煮膳を居へて」と端書した「這へ笑へ二つになるぞけさからは」の句があります。長い間、流浪艱難をした揚句ですから、この喜びはその筈です。で、子供が生れたので、大變喜んで匍へば立て立てば歩めと可愛がつて居るうちに、その子供が瘡瘡にかゝりました。その瘡瘡が段々順調にかせて行つたので、まあこれならばと云つて居ると、俄かに死んで了つた。なぜ他所の子は生きて居るのに家の子だけ死んだ、この世は露の世だ、如露亦如電であるとかねて知つて居るが、さり乍ら儂なものだと、

露の世は露の世ながらさりながら

の哀しい句を作つて居ります。これも『おらが春』のうちに、「母は死良にすがりて、よ、く、と泣くもむべなるかな、この期に及んでは行く水のふた、び歸らず、散る花の梢にもどらぬくひごとなど、あきらめ良しても、思ひ切りがたきは恩愛のきづな也けり」と書いてゐます。わかつて居るがさりながら、てございます。このさりながらは、涙で以て満たされたさりながら、てございます。一茶は其條の引として、「似た良もあらば出て見ん一踊」といふ落梧の句、「夜の鶴土に蒲團も著せられず」といふ其角の句、「春の夢氣の違はぬがうらめしい」といふ來山の句、さては其他の古句やまた古歌などもあるしてゐます。皆子を亡つた人の作です。思ひ餘り涙に咽んで筆を執つたのでせう。一茶の身にはなほも不幸が續きました。その女子の後にまだ他の子供もありまし

たが、これも死に、しまひには子供（それも尋いで歿す）を遺して妻のきくも文政六年五月に死んで了ひました。きく女は年齢も一茶とは餘程違ひますが、一茶の心持をよく理解したので、非常にむつかし屋の一茶の心も和らいてゐました。それで一茶も女房を信賴してゐましたが、その女房が死んだのであります。

一茶は文政三年の冬の初めに中氣に罹りましたが、それは翌年快くなり、いろく、不自由でもございますから、同七年の夏に後妻雪女（時に三十八歳）を迎へました。ところがこの第二妻は士分の家に生れたのを誇つたのか、屢々里歸りをするし、その外も一茶とは氣が更に合ひません。一茶は多情多感の人で、殊に弱いもの小さいものをいたはる心が深うございました。然るに一茶が挿木などをして、一所懸命に根づかせようとすると、その二番目に來た細君

がそれを引抜いて了ふ。それで一茶は、何んと云ふ酷い性分の女だと思つて悲しがる。こんな風で離縁して了ひ、三度目に六十三歳で貰つたのがやをと云ふ奥さんです。この人は越後の生れて、その頃柏原で乳母になつてゐたものです。當時四十六歳でありました。併し奥さんは貰ひましたが、一茶は老年の健康すぐれず、生活も樂でありませんでした。が遊んでゐてはやつて行けませんから、近邊の門人の家を廻つたり、村の若い衆の俳句などを見てやつて暮して行きました。

ところが、文政十年六月一日に柏原に火災がございまして、一茶の家俳諧寺も類焼いたしました。幸ひ土藏が火を免れましたので、一茶はそこに假住居をしました。そしてその年の、即ち文政十年の十一月十九日の夕に、中風再發の養生叶はず、六十五歳で佛號を念じて往生しました。法名は釋一茶、墓は明

三三
專寺の小丸山の墓域にございます。一尺五寸許りの石塔の正面には南無阿彌陀佛と刻してありまして、累代一家の遺骨は皆こゝに納められてゐるのであります。さて一茶の歿しました時は、三度目に貰つたやを、と云ふ奥さんが妊娠中でありました。それから翌年になつて、その子が生れました。それは女の子で、やた女と名づけられました。その人は随分のお婆さんになつて生きてゐられたのですが、その顔が洵に一茶によく似てゐたと云ふことでございます。私は先年柏原へ参り、一茶の御墓に野菊を手向け、それから一茶の住んでゐた土藏を見ました。明專寺と云ふのが一茶の菩提寺で、その寺の庭の松蔭に大きな鐵瓶を掛けて、一人の人が居られ、「あなた方は、こんな所へ來る位だから、併句か何かやるんでせう。こゝへ來た記念に短冊をひとつ書いて下さい」と言はれる。下手で恥かしいのですが、併し、書けないと言つて斷りもなりま

三三
せんから、つまらぬものを書かせて頂きました。それから、「お茶を一眼如何です。この鐵瓶は一茶が使つてゐた鐵瓶ですから、この鐵瓶で沸かした湯でお茶を進ぜる」と云はれますので、辭退せずに澤庵でお茶を頂戴いたしました。それは大正十年かの八月二十一日の事で、随分暑い時でありましたが、そこは松風が吹いて涼しうございました。その時に前に申しましたやうに、一茶の像を買はうと思ひましたが、荷物が多いため止めまして、その附近から當地へ來て居られる方に願つて買つて貰ひました。そしてそれを買つて頂いた人が私に言はれるのには、この塑像は一茶の像であるが、一茶が生きて居る時に寫したものでない、一茶が死んだ時に妻女のお腹に居つた娘さんが、お父さんの一茶によく似てゐたから、その人をモデルにして故人を想ひ浮べて作つたものだといふ事であると。これは承つた通りを申述べるのでございます。

以上、一茶の一生涯に就いて、段々申上げましたが、本當に彼は幼ない時から世にも哀しい生活を送つて、誠に氣の毒な人でございました。そこで、自然世を憎むと云ふか、恨むと云ふか、さういふ暗い所が始終附纏つてゐたのでございます。例へば筈ははじめ眞つ直ぐに頭を出す、追々厭な風に曲つて來る。眞つ直ぐに伸びたらよかりさうだが曲る。人間も生れた時は、いゝが、段々年が行くと共に悪くなる。乃ち、

段々に大筈の曲りけり

と言つて居り、それから今度は、花が咲いて居る「あゝ綺麗な花だな」と思つて側へ行つてみると、をかした枝振で割合にどうもいゝのが無い。

氣に入つた花の木、かけもなかりけり

また、杜若が咲いて居るが、俺の家の杜若はどうも小さい。

我庵や花の小さい杜若

かう云ふ風に、皆いけないことばかり言つて居ります。それから、のし餅と云ふのがございます。これは目出度いものですが、そののし餅をヂツと見て、のし餅は目出度いか知らぬが、皴手のあとがついて居ると云ふので、

のし餅の皴手のあとは隠れぬぞ

まあさう言はないでもいゝこと迄、一々物のあらを見出すと云ふ風でございます。

江戸に居りました時分に、一茶は品川の東海寺に參詣いたしました。ところが、鶏が後からコツコツとついてまゐりました。一茶は多情多感の人で

ものを可愛がる心を有つて居り、愛したくてならぬが、それを愛することが出来ないと悩み出します。鶏が後について来たから、可愛い鶏だと思つて、東海寺の門前で一合の米を買つて、それを鶏に撒いてやりますと、そこに居る鳩がやつて来て食べる。雀も来て食ふ。俺は鶏にやらうと思つてやつた。鳩や雀にやらうと思つたのでない。どうしてお前達は食べるかと怒つた。世の中はかうだ、この人があの人によらうとしても、第三者の狡い奴が手を出す。鳩や雀が横から来て食べるやうに、狡い奴が世の中の利益を得る。正直な者は損をしてつまらない破目に立つ。怒じつか施行は罪であると思ひました。

米まくも罪ぞよ鶏が蹴合ふぞよ

また或時、春雨の中に鴨がなくて居るのを見まして、他のやつは皆食はれて了つた、あそこに居る鴨は食はれ残りだらうと云ふので、

春雨や食はれのこりの鴨が泣く

さう云ふことを言はないと、氣がすまぬのでございます。

五月雨が降つて、榎が若葉すると、面白い風情だから、若葉はいゝと誰でも賞てるが、葉が繁つて邪魔になるとか、恰好が變だとか、難癖を附けて憎まれるのもあるので、

若葉してまたもにくまれ榎かな

と云つて居ります。何でもさう云ふ風に、病的に頭が冴えて居ります。その病的の頭でもものを見て行きますから、この榎は恰好が悪い憎まれ榎だとか、この鴨は食はれのこりだとか、鶏が蹴合ふとか、のし餅に皺手のあとがあるとか、それぐゝの缺點ばかり指摘して行く。彼はこの目で、この冷やかな目で、弟でも繼母でも故郷人でも月雪花でも鶏でも、總てを裁いたのであります。斯様

に繼母の心が不可ない、仙六の態度が悪い、俺の家の杜若は花が小さい、故郷の蠅は人を刺すと云ふ鹽梅に、段々缺點を指摘して、すべてのものをズン／＼裁いてゆき、批評して行き、點數を附けて行きましたが、結局彼は總てから離れ、總てから離された淋しい一人を見ました。

ひいき目に見てさへ寒きそぶりかな

自分は正直で嘘は言はないにせよ、他の缺點を見出す癖があるのは、尠くとも宜しくないと云ふこと、それは他を裁き裁いて、自らを裁いた結果であります。他のことを一々評價して、悪いことばかり見出して言ふと云ふことは、假令それが本當であらうとも、それは慘酷な心であり、冷やかな心であり、ひがんだ物の見方である。温かな心の無い奴だ、親しい人が無いのも尤もである、自分の所へ氣がつかしました。彼は限りなく淋しいのであります。

福豆も福茶も只の一人かな

新春の福豆を喰べるのも、福茶を飲むのも一人であり、

衣更へて坐つてみても一人かな

綿入れを脱いで袷に着更へて坐つてみても一人であり

あら涼し涼しといふも一人かな

あ、今日は涼しい、と言はうにも相手がなく、

爐を開けてみてもつまらぬ一人かな

爐開きをやつてみてもつまらなく、

一人と帳面につく寒さかな

宿屋に泊まつても、淋しく帳面に一人とつき、

木に餅をならせてからが一人かな

こんな風では、木に餅がなるやうな事があるにしても一人である。寂しい寂しいと彼は思つてゐた。かくて、これ迄他のみを批評してゐた自分を、自ら厳しく反省した時、自分も亦同じく缺點の多い人間であつた。裁く人も裁かれる人も、共に浮世の人間である。假にあの人々は極樂に往生するとして、この人は上品の上生、この人は上品の中生、この人は上品の下生、この人は中品の上生、この人は中品の中生、この人は中品の下生、この人は下品の上生、この人は下品の中生、この人は下品の下生と云ふ鹽梅に、その九品の等級が附けられるであらうか。又地獄にもいろいろ種類があると云ふが、それも同様である。この私がどこの地獄へ行くか、どこの極樂へまゐるか、少しもわからないではないか。それを知つて居るのは唯だ、あなただけである。我も浮世の人、他の者も浮世の人だから、さう悪口は言へない。自分はひたすらにあなたにおまか

せする安らかさに居たい、總ての事はあなたのみ、である、そこ迄氣がつくと、彼の行き詰つた道は開けた。あなたまかせにしたら、勝手な放埒をしていいと云ふのでは、無論決してありません。あなたまかせは信ずる心でありませぬ。「鰯の頭も信心から」と申しますが、鰯の頭は信じようとしても信ぜられませぬ。信ずるに足るものでなくては、私共は信じられないのであります。そして、例へば、あの人は私の信ずる主人だ、あの人は私の信ずる長上だとなれば、私どもはその心から信ずる人の機嫌に逆ひたくありません。少しでも信ずる人の氣分を悪くするやうなことはしたくありません。これが人情でございます。また、人はその信ずる人に似るものである。表情、素振り、着物の着方、文字の書き方、何から何迄、よくあんなに似て居ると云ふ位、それ程よく似て來るものであります。で、眞に信ずると云ふことから、その氣分を受け、その氣

分に順應するといふことになるのでありますから、信ずる以上、あなた、まかせと云ふ以上、自分勝手な放埒は自然に出来なくなる譯でございます。あなた、まかせと云つて佛様を信じた以上、佛様のお嫌ひなことは出来ません。まかせたあなたを裏切るやうなことは出来ません。

一茶はさう云ふ點が段々わかつたのでございます。初めから頭の鋭い人ですから、細かい人の氣のつかないやうなことでもよくわかつたのであります。すが、兎角にその業ごまに煩はされ、煩惱に味まされてゐたのであります。然るに家累代の信仰が沁み込んで居り、導きの光りを受ける機縁を得まして、反省領會し、これ迄潜んで居ました芽が清らかに伸びました。尤も先刻申しました

通り、一茶は情の深い人でしたから、常に三歳で別れたお母さんのことを懐つて居り、

亡き母や海見るたびに見るたびに

かう言つて、母を慕つて居りました。また、江戸で一時上野の坂下に一軒の家を借りて住んでゐたのですが、そこへ移つてゆきますと、前に住まつて居た借家人の播いて置いた菜ッ葉が、空地に芽を出して育つてゐました。そして垣には朝顔の花が咲いて居ました。また、壁を見ると、七難消滅七福即生の守札が貼つてあります。一茶はそれを見て、哀れを催し、

身に添や前の主の寒さまで

前に居つた人は、この守札の御利益があつたかどうか、今どこに暮して居るかと思ひやつたのであります。眞に人間と云ふものは、温い心を持つて居れ

ば、自らかう云ふ氣持が起つてまゐります。一茶も斯様にやさしい氣分を持つてゐましたが、はじめは、それが小さいものや弱いものに向つてのみあらはれ、大きいものや強いものには、わざとも反抗するやうな處がありました。でも、或年の暮に作りました句に、

叱らるゝ人うらやまし年のくれ

とございますが、今自分を叱つて呉れる人は一人も無い、若し叱つて呉れる人があつたら、どんなにか嬉しいだらうと云ふ心持です。親などが眞剣に叱る時は、裸になつて叱ります。心を裸にして、遠慮無く直接に叱つて呉れるのは親などより他にございません。親は遠慮の衣を脱いで直接に肉迫して叱つて呉れるから、嬉しい、有難い。それで一茶も、叱られたいと思ひました。しかしそこに、こ、だ、は、りがあるとなか／＼叱ることが出来ません。こつちが叱つ

ても、後に氣分が悪くなるからと叱らずに置く。で、眞に叱つて呉れる人が欲しいと思ふ。一茶の家の宗旨は眞宗でございますから「あ、な、た、ま、か、せ」と云ふ言葉は、子供の時から耳に親しんだ言葉で、今迄は他ばかり裁いて來たが、その他を裁いて來た自分を反省し、自分を自分で裁いた時に、そこにはじめて、眞の「あ、な、た、ま、か、せ」と云ふ心持がハッキリしましたので、それからの一茶は「あ、な、た、ま、か、せ」のうちに安らかになりました。一茶の作を見ますと「あ、な、た、ま、か、せ」と云ふ語を持つ句が、まことに多いのでございます。そしてその「あ、な、た、ま、か、せ」の語を使つてゐる中に、追々眞の安心の境地に近づいて參つたやうでございます。と同時に、「あ、な、た、ま、か、せ」の語が益々多く使はれるやうになりました。

秋風にお任せ申す浮藻かな

雨笠も日笠もあなた任せかな

涼風もほとけまかせの我身かな

「まかせ」と云ふ語は、一茶の『七番日記』にも澤山見えますが、試みにそれ等の句を拾つてみますと、二十句餘りは容易く見出されました。

何事も南無阿彌ダブツ閑古鳥

町住や涼む中でもナムアミダ

と云ふやうな句もあります。あの有名な、

ともかくもあなた任せのとしのくれ

と云ふ句を作つたのは、文政二年でありまして、兎も角も皆投げ出して佛様におまかせすると云ふので、この句は十二月二十九日と奥に日附して、『おらが春』に出て居ります。その年は即ち、自分の可愛い娘を痘瘡で喪つて「露の世は

露の世ながらさりながら」と言つて泣いた年でございます。娘を喪つた時の文章は讀むに堪へない程悲しい文章であります。さう云ふ年でありますから、何事もあなたまかせと合掌して年を送つたのでありませう。

煩悶の中に安心の道を見出して、一茶の心持は和らぎを得ました。長い間血の涙で暮した生活の後に、かう云ふ境地に到達したのであります。一つは五十二歳で始めて結婚して、久しく離れてゐた故郷に安住したことが、もつれてゐた糸の解ける初めてもあつた。併し、大きな一茶の心境の變化は「あなたまかせ」の立命から來ました。元來、一茶の持つてゐるやさしい佛心が大きくあらはれるに至つたのであります。そして、彼の獨特の滑稽味ある句は、益々

光を放つて、奥行が深くなりました。嘗ては、

どの炭も思ふ通りに割れぬぞや
と言つたのが、

曲つても一つけしきやおこり炭

曲つたのもおこつてみると、洵に面白い風情があると言ふやうになりました。初めには、

わが庵は露の玉さへいびつなり

まんまるな露の玉さへ、自分の家の露はいびつだと云ふ風に見て居つたのに、この「あなたまかせ」の心持になつてからは、

白露も見やうによりてお舍利哉

と云ふやうになりました。一茶は、地獄も極樂もあなたまかせ、と言ひました

が、そこには打寛いだかねては見なかつた世界がありました。圓融無碍の世界には、こだわりがありません。彼はこだわりの無い世界の光を認めて來ました。平面上に箸を二本筋違ひに置いたら交叉いたしますが、奥行のある所ならば、交叉するやうな恰好でも相離れて切り違ひになります。「あなたまかせ」で、圓融無碍の大きな世界へ出れば、こだわりが無いから、月を見ても、雪を見ても、花を見ても、鳥を見ても、獸を見ても、虫を見ても、皆面目を改めるのでございます。

寢た所が花の信濃ぞとしのくれ

雁鴨のきけん直るや春の雪

蝶とまれも一度とまれ草餅に

美しき佛になるや蝶夫婦

美しき佛になるや蝶夫婦——と云ふのは蝶の亡骸が叢にあつたのでせう。

降る雪の中も春風吹きにけり

彼は雪裡の春風をなつかしむに至りました。これまでは雪の寒さばかり啣つてゐましたが、雪降の寒さの中にも一脈の春風來れるを見通さないやうになりませんでした。

前にも申述べました如く、「あなた、まかせ」は信ずる事から起り、信ずる者はその信ずる所を裏切ることが出来ません。裏切りつゝ、信ずることは出来ぬ事てあります。此に於て一茶は淨化せられざるを得ないのでございました。抑も「あなた、まかせ」に淨化せられたところに、何のこだはりがあらう筈がありません。その時こそ本當に笑ひ得るやうになるのであります。本當に喜び得るやうになるのであります。そして本當に他を愛し得るやうになり、

また本當に他から愛せられ得るやうになるのであります。随つて愛し得ない苦しみも無くなり、愛されない苦しみも無くなります。

私は、かう云ふ風に考へて、一茶の心境と句境との進展をゆかしく眺め、「あなた、まかせの安心」を本當に有難く思ふのでございます。(完)

一
茶
俳
句
選

一茶生涯の作句中より、佳句と推すべきもの、特色
の見るべきもの、その爲人その境遇を窺ふべきも
のを、句集・句帖・撰著・撰集・墨蹟等に就きて抄出する
こと、凡そ五百六十、これを四季に別ち、卷末に季題
を載せて檢索に便ず。

一茶俳句選

石田元季編

春

元日 家なしも江戸の元日したりけり

舊臘棲家をうしなひて成美の宅に春を迎ふ（文化六年）

こその五月生れたる娘（さと女）に一人前の雞煮膳を据

あて(文政三年)一句

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは
元日や上々吉の浅黄空

初春も月夜となりぬ人の顔

四十年振にて古郷に入る

ふしぎく生れた家で今朝の春

おのれらは俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴龜にたぐへての祝盡しも厄拂ひの口上めきてそらくしく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑家はくづ屋のあるべきやうに門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形りにことしの春もあなた任せになんむかへける

目出度さもちう位也おらが春

正月や夜は夜とて梅の月

正月やころりと寝たるとつとき著

初空壁の穴我初空もうつくしき

薄墨のやうな空でも初空ぞ

初空を夜著の袖から見たりけり

初日松竹のゆきあひの間より初日哉

我々が顔も初日や御代の松

注連飾

つんとして飾りもせぬやてかい家
吹けば飛ぶ家の世なみや注連飾

福もの

福豆も福茶もたゞの一人かな
福藁や十ばかりなる供奴

若水

ちとの間はあひや若水てなかりけり

雑煮

君が代や旅にしあれど筒ひの雑煮

もとくの一人前ぞ雑煮膳

文化十一年五十二歳にして始て妻を迎へ、同十三年長男生れて天し、同十四年二男生れて同じく早世、文政元年長女生れて翌二年歿し、同三年三男生れて同五年逝き、同年四男生れ、同六年妻菊女先だち、同年の末四男も亦たみまかる、故に右の作あり

年始 御年始の返事をするや二階から

福壽草 帳面の上に咲きけり福壽草

神國や草も元旦きつと咲く

初夢 初夢にふるさとを見て涙かな

吉書 小坊主が棒を引いても吉書かな

書賃の蜜柑見いゝ吉書かな

萬歳 萬歳のまかり出てたよ親子連

風 人の親風を跨いで通りけり

里しんとしてづんづと風の上りけり

反古風のあたり拂て上りけり

羽子 つく羽根を犬がくはへて参りけり

風抱いたなりですやく寝たりけり
すゝけ紙まゝ子の風と知られけり

小兒のあとけなさを

手毬 鳴猫に赤ん目をして手まりかな

若菜 一桶は如來のためよ朝若菜

長閑 長閑さや浅間煙りの晝の月

長閑さや垣間を覗く山の僧

遅日

ばか永い日やと口あく鳥かな
日が永いくとのらりくらり哉
丸にのの字の壁見えて暮遅き
有りがたや能なし窓の日も伸る

水温む

鷺鳥雀の水もぬるみけり

春雪

ふる郷や餅に搗きこむ春の雪

雪解

世にすめば無理に解かすや門の雪
片隅に鳥かたまる雪解かな
庵の雪下手な消やうしたりけり
鍋の尻ほしならべたる雪解かな
門前や子供で作る雪解川

霜解

霜解やとらまる枝は茨なり

春暮

木兎のつら魂よ春の暮

春 月 浅川や鍋すゝぐ手に春の月

春 風 松苗も肩過ぎにけり春の風

春風の夜にして見たる我家かな

春の風足むく方へいざさらば

春風や逢坂越る女講

春風の底意地寒し信濃山

春風やとある垣根の赤草履

春風や牛にひかれて善光寺

春 雨 昨日寝し嵯峨山見ゆる春の雨

春雨や家鴨よちく門歩き

宿山寺、一句

春雨や窓も一人に一つづゝ

春雨や喰れのこりの鴨が鳴

鳩いけんしていはく、一句

鳥よつらくせ直せ春の雨

芝居日と人はいふ也春の雨

春雨や腹をへらしに湯につかる

春雨に大あくびする美人かな

掃溜の赤元結や春の雨

陽炎

陽炎や子をなくしたる鳥の顔

陽炎や土の姉さま土僧都

陽炎や狐の穴の赤の飯

ゐざり

陽炎や手に下駄はいて善光寺

陽炎や蕎麥屋が前の箸の山

みどり子の二七日

陽炎や目につきまよふ笑ひ顔

霞

春霞歛とらぬ身の勿體な

鼻のこれは霞まぬつもりかな

かすむやら目が霞むやら今年から

右の一句、『七番日記』に見ゆ、文化十年の作なるべし、
同八年既に頭髮白く齒すべて落つ

ふる郷やいびつな家も一かすみ

我里はどう霞んでもいびつなり

妻なしやありや霞んで居る小家

春霞いつち小さいぞおれが家

霞む日や森閑として大座敷

雛

あとの家見るや霞めば霞むとて
霞むならかすめと捨てし菴かな
一引や下手なかすみもおれが家
かすみけり憎い宿屋もあとの村
白壁のそしられながら霞かな
盗人の霞んでけゝら笑ひかな
信濃路やそれ霞それ雪が降る
今日の日もがらくた店の離かな
煤け雛しかも上坐を召されけり

山 焼

寝よ子供焼ける山から鬼が来る
山焼の明りに下る夜舟かな

種 蒔

山鳥や種まきよしと鳥の啼く

畑 打

畑打や鋤てをしへる寺の松
畑打や子かはひ歩行くつゝじ原

接 木

たのみなきおれがさしてもつく木哉

猫の戀

あれも戀ぬすつと猫と呼ばれつゝ
鼻先に飯粒つけて猫の戀
寝て起て大あくびして猫の戀
浮れ猫頭はりくらしたりけり

猫の子

猫の子や秤にかゝりつゝじやれる
人中を猫も子故のぬすみかな

天王寺一句

鶯

鶯や彌陀の浄土の東門

雲雀

これ程の上鶯を田舎かな
鶯や御前へ出ても同じ聲

野大根も花咲きにけり鳴く雲雀
木曾山はうしろになりぬ鳴く雲雀
横乗りの馬のつゞくや夕雲雀

燕

鳥々も佛法ありて燕かな
婆見やれあれよ燕がまめな貌
さぶこぶをじつと見て居る燕哉

ふらんどにすり違ひけりむら燕

(ふらんどは鞆の里言)

夕燕われには明日のあてもなし

歸雁

はげ山も見知つておけよ歸る雁
雁にさへとり残されし栖かな
雁どもは歸る家をば持つたげな

雀の子

我と來てあそべよ親のない雀
夕暮や雀のまゝ子松に鳴く
瘦せたりな子につかはるゝ門雀

雀子やそこのけく御馬が通る
雀子のはや知りにけり隠れやう

鳥の子

またむだに口あく鳥のまゝ子哉

蛙

蛙なくや始めて寝たる人の家
夕富士に尻をならべてなく蛙
悠然として山を見る蛙かな
瘦蛙まけるな一茶是にあり

蝶

閑伽棚に蝶も聞くかよ一大事
うら住や五尺の空も春の蝶
善の綱しつかり蝶のすがりけり
風呂水の小川へ出たり飛ぶ胡蝶

月をめで花にかなしむは雲の上人にして、一句

若草

おらが世やそこの草も餅になる
若草に背中をこする野馬かな

東御門迹まれの下向に

木の芽

木々もめを開くやみだの本願寺

梅

梅が香やおろしやを這はす御代にあふ
梅咲けど鶯啼けどひとりかな
梅が香やどなたが來てもかけ茶碗
紅梅に乾しておくなり洗ひ猫
梅さくや手垢にひかるなて佛

柳

行燈におつかぶさりし柳かな
犬の子のくはへて寝たる柳かな

櫻

櫻さく大日本ぞ日本ぞ
誰も居ぬうしろ座敷のさくら哉
傘にべたりくとさくらかな
天からでも降つたるやうに櫻哉
氣に入つた櫻のかけもなかりけり
我國は草もさくらを咲きにけり (櫻草)
君が代の大飯喰うて櫻かな
花ちのく日本だましひいさましや
下々に生れて夜も櫻かな
塵の身のふはりくと花の春

山櫻皮を剥がれて咲きにけり
花咲けや佛法わたる蝦夷が島
花咲くや欲のうき世の片隅に
欲面へあびせかけたるさくらかな
花の陰あかの他人はなかりけり
ありやうは我も花より團子かな
咲く花を當に持出す佛かな

荊 萱 堂

花の世は地藏菩薩も親子かな

夏

更衣

のらくらも御代のけしきぞ更衣
年間へば片手出すやころもがへ
衣更て坐つて見てもひとりかな

裕

たちまちに寝皺だらけの裕かな
たのもしやてんつるてんの初裕

佛生會

御佛や蝦夷が島へも御誕生
御指に錢が一文誕生佛

藥降

神國は天から藥降りにつけり

五月雨

五月雨や線香立てし煙草盆

田植

路の葉にいわしを配る田植かな

身一つ過すとて、山家のやもめの哀さは、一句

おのが里しまうてどこへ田植笠

勿體なや寝ながらに聞く田植唄
葛飾かつしかや早乙女がちの渡し船

住吉御田植

唐人も見よや田植の笛太鼓

麥秋 麥秋や子を負ひながら鱒賣

青田 背戸の富士青田の風の吹過る

稽古笛田はことごとく青みけり

短夜 短夜をあくせくけぶる淺間かな

短くて夜はおもしろやなつかしや

暑し 暑き夜をありがたがりて寝たりけり

暑き日や子に踏ませたる足のうら

暑き夜の荷と荷の間に寝たりけり

米國の上々吉のあつさかな

路の葉にぼんと穴あく暑さ哉

涼し 涼しさや缺け釜一つひとりずみ

裏門やたれも涼まぬ大榎
門涼み夜は煤くさくなかりけり
芭蕉様の臍をかぢつて夕涼
大の字にふんぞりかへる涼かな
大の字に寝て涼しさよ淋しさよ
下々も下々下々の下國の涼しさよ
あす知らぬ盟の魚や夕涼
月さへもそしられ給ふ夕涼
涼しさや彌陀成佛のこのかたは
あら涼し涼しといふもひとりかな

涼まんと出づれば下にく／＼かな
寝て涼む月や未來がゑそろしき
江戸で見た山はこれなり一涼み

涼風も佛任せのわが身かな

裏長屋のつき當りに住居して

涼風の曲りくねつて來たりけり

夏山 夏山や一足づゝに海見ゆる

清水 湧く清水浅間の煙また見ゆる

ふる郷や厠の尻もわく清水

小金原

母馬が番してのます清水かな

夕立 夕立の裸湯うめて通りけり

夕立や行燈直す小縁先

夏月 寝せつけし子の洗濯や夏の月

雲峰 投げ出した足の先なり雲の峰

川狩 川狩や地藏の膝の小脇指

晒井 新らしい水湧く音や井の底に

振舞水 門雀振舞水をまづ浴る

晝寝 親方の見ぬふりされし晝寝かな

逢坂や荷牛の上に一と晝寝

人なみに晝寝したふりする子哉
田のくろや菰一枚のひるね小屋
山水に米を搗かせて晝寝かな

汗

大名の撫でてやりけり馬の汗

帷子

帷子を眞つ四角にぞ著たりける

囁

今見ればつきだらけ也おれが囁かや
雨晴や蚊帳の中なる朝煙草

夏花

夕陰や駕の小脇の夏花持

御祓

夕祓鴨十ばかり立ちにけり
母の分も一つはくゞる茅の輪哉
麻の葉に借錢書て流しけり
形代も肩身窄めて流れけり

時鳥

ほととぎす湯煙そよぐ草そよぐ
急ぐかよ京一見ののほととぎす

閑古鳥

閑古鳥信濃の櫻咲きにけり
前の世のおれがいとこか閑古鳥

鶺鴒

草の雨あのが家とや鶺鴒のもどる
疲れ鶺鴒や子をふり返りく
疲れ鶺鴒の叱られてまた入にけり

行々子

行々子大河はしんと流れけり

鳩の巢

鳩の巢のひともと草をたのみ哉

火取虫

如是決定してや火とりむし

蟬

浮島や動きながらの蟬時雨

墓

ひきがへる我をつくぐ睨つける

蝸牛

ぬれたらぬ草の月夜や蝸牛

螢

我門や螢を宿す草も無き
ゆけ螢手のなる方へなる方へ

大螢ゆらりく〜と通りけり
螢籠惟光これへ召されけり

蛭

涼風をはやせば蛭が降りにけり

子

子

けふの日も棒ふり蟲よあすも又

蚊

夕空や蚊が鳴き出してうつくしき
十念を受けるこぶしへ鳴く蚊哉

庵無一物

あはれ蚊のから戻りする夜明け哉

蠅

やれ打つな蠅は手をすり足をす
ふる郷は蠅まで人を刺しにけり
笠の蠅我より先へかけ入りぬ
人あれば蠅あり佛ありにけり

蚤

蚤のあとそれも若きは美しき
猫の子が蚤すり付ける榎かな
蚤どもも隠るゝ術は知りにけり

文政十年六月火災にあひ、焼けのこりの土蔵に住む
(この年十一月十九日
一茶この假住に歿す)

焼けあとやほかりくくと蚤さわぐ

筍 足序若筍も折られけり

筍に病の無きはなかりけり

牡丹 唐びいきなさるゝ寺の牡丹かな

菖蒲 草屋根やさゝぬ菖蒲は花が咲く

杜若 杜若低い花にも風が吹く

太刀かつぐ子の可愛さよ杜若

杜若花ゆゑに葉も切られけり

卯の花 卯の花もほろりくや墓の塚

卯の花や子供のつくる土團子

梅の實 瘦せ梅のなり年さへもなかりけり

柿の花 澁柿のしぶく花の咲きにけり

若葉

若葉してまたもにくまれ榎哉
しんとして若葉の紅い御寺かな
愁ひにあかい若葉の淋しさよ
若葉して御八日講の幟かな
消し炭の庇に乾く若葉かな
乗掛のひよつくり出たる若葉哉
十團子蔦の若葉につゝむべし
摺鉢をかぶつたなりて若葉かな
梅の樹の心しづかに青葉かな

茂り

伊香保根や茂りを下る湯の煙

夏木立

塔ばかり見えて東寺は夏木立
家ありてまた家ありて夏木立
人聲に蛙の降るなり夏木立

瓜

瓜一つ丸にしづまぬ井なりけり
頬べたにあてなどしたる真瓜哉

晝顔 晝顔やぼつぼと燃える石ころへ

夕顔 夕顔や馬の尻へも一つ咲く

百合 われ見ても久しき墓や百合の花

茨の花 ふる郷やよるもさはるも茨の花

茨の花 こゝを跨げと咲にけり

蓮

蓮池やつんとさし出る乞食小屋
薄べりや蓮に吹かれて夕茶漬
蓮の花少し曲がるも浮世かな

秋

初秋 初秋や瘧の落ちたやうな空
草刈や秋ともしらて笛を吹く

秋立 秋立つや身はならはしのよその窓

冷か よりかゝる度にひやつく柱かな

秋寒 秋寒やゆく先々は人の家

うそ寒 うそ寒や如意輪さまもつくねんと
うそ寒や親といふ字を知てから

朝寒 朝寒や垣の茶笈の影法師

夜寒 門の樹に梯子かゝりて夜寒かな
あばら骨なてじどすれど夜寒かな
救世観世音かゝる夜寒を助け給へ

膝がしら木曾の夜寒にふるひけり
次の間の灯で飯を喰ふ夜寒かな
行燈のしんくとして夜寒かな
一人と帳面につく夜寒かな

田 中

夜 永 一の湯へ灯貰ひにゆく夜永哉

病 中

なむあみだ南無阿彌陀佛夜永かな

秋 夜 秋の夜や旅の男の針仕事

板敷山の麓に臥して

秋の夜や祖師もかやうな石枕

秋 夕 野歌舞伎や秋の夕日の真中に

さぼてんやのつべらぼうの秋の夕
うかくと人に生れて秋の夕

秋 暮 わが植し松も老けり秋の暮

一つ鳴くは親無し鳥よ秋の暮

越後節藏に聞えて秋の暮
さを鹿や片膝立て、秋の暮
江戸江戸と江戸へ出づれば秋の暮

病 後

えいやつと活きたところで秋のくれ

善光寺の柱に舊友の名あり

知つた名の落書見えて秋の暮

文政六年妻菊女歿し、遺見金三郎這ひならふ、一句

をさな子や笑ふにつけて秋の暮
草からも乳は出るぞよ秋の暮

末 枯 末枯や諸勸化入れぬ小制札

秋の原 秋の原知つたら何ぞうたふべき

秋 風 朝ぶしや身にしみくと秋の風

秋風や家さへ持たぬ大男

秋の風我が身一つの西日かな

焼け柱轉げたなりに秋の風

草原や豆腐の殻に秋の風

秋風や壁のへまムシヨ入道

秋風や横に車の小役人

奥州うそり山

秋風や我がうしろにもうそり山
秋風に歩いて逃げる螢かな
秋風や磁石にあてる故郷山

正見寺の上人十ばかりなる後住をのこして遷化ありし
を悼む、一句

秋風やちひさい聲のあなかしこ
からかみの引手の穴を秋の風
さびしさに飯を喰ふ也秋の風

文政二年、二歳にて夭せし長女さと女の三十五日に

秋風やむしり残りの赤い花

病後

かな釘のやうな手足を秋の風

秋雲 夕暮や鬼の出さうな秋の雲

橋見えて暮れかゝるなり秋の雲

天の川 うつくしや障子の穴の天の川

木曾山へ流れ込けり天の川

七夕

星待や龜も涼しいうしろつき
ふんどしに笛つきさして星迎
七日の夜たゞの星さへ見られけり

露

露はらりはらり大事のうき世哉
露散るに彌陀の御苦勞遊ばさる
せはしなの世や下る露上る露
草刈や火を打こぼす露の原

さと女を哭す（文政二年）

露の世は露の世ながらさりながら

霧

有明や淺間の霧が膳を這ふ
山霧の通り抜けたり大座敷

秋雨

秋雨やともしびうつる膝頭
秋雨や乳ばなれ馬の旅に立つ

稻妻

稻妻やうつかりひよんとした顔へ
稻妻や浦の男の供養塚
稻妻や狗ばかり無欲顔

待宵 江戸川や月待宵の芒船

月

名月や門からすぐに信濃山
煤くさき壘も月の夜なりけり
名月や高観音の御膝もと
名月や西に向へば善光寺
泣くなとて母の踊るや門の月
名月や膝へ這ひよる子があらば

文政二年

名月や五十七年旅の秋

踊

名月やつい指先の名所山
名月や御覽の通り屑家かな
ふる郷の留守居も一人月見かな

病中

名月や寝ながら拜むていたらく

赤紐や手をひかれつゝ踊り笠

文政五年、一昨年生れし三男石太郎逝く

石太郎この世にあらば盆踊

八朔 八朔や盆にのせたる福俵

砧 行燈を畑に置いてきぬたかな

雨の夜やつい隣りなる小夜砧

案山子 朝顔のちよいと咲いたる案山子哉

晝飯をぶらさげてゐる案山子哉

鳴子 一つづゝ寒い風吹く鳴子かな

田番 人ありと見せる草履や田番小屋

角力 負相撲板行にして賣られけり

盆 文政六年五月妻菊女歿す、遺子金三郎二歳
かたみ子や母が來るとて手をたたく

迎鐘 旅人のならしてゆくや迎鐘

墓參 餘り花人の墓へも參りけり

末の子や御墓参りの箒持

燈籠

夕風や木の無い門の高燈籠
草原にそよ／＼赤い燈籠かな
みなしごや手をひかれつゝ墓燈籠
燈籠の火で飯を喰ふ裸かな

送火

送り火やばたりと消てなつかしき

雁

初雁の三羽も竿となりにつけり

外ヶ濱一句

けふからは日本の雁ぞ樂に寝よ
連のない雁よ來よ／＼宿かさ
雁よ雁いくつの年から旅をした
おとなしく雁よ寐よ／＼どこも旅

鹿

一の湯は錠の下りけり鹿の鳴
さを鹿は萩に糞してわかれけり

蛇入穴

蛇も入る穴は持つなり鈍太郎

秋
蟬

秋の蟬ころび落ちては又鳴きぬ
仰のけに落ちて鳴きけり秋の蟬

蚕

夕汐や塵にすがりてきりんす
今掃きし箒の中のきりくす
妻やなきしわがれ聲のきりくす
寝返りをするぞそこのけきりくす

蟬

こほろぎのとぶや唐箕の埃先

鰯

越後女を

鰯めせめせとや泣く子負ひ乍ら

芒

御射山祭三句

諏訪山やすべた芒も祭らるゝ
ちぐはぐの芒の箸も祝ひかな
御射山や見ても涼しき芒箸

萩

瘦萩や松の陰から咲きそむる
鹿の子や横にくはへし萩の花

玉川や白に敷かるゝ萩の花
芥取の箕に寝る犬や亂れ萩

朝顔

朝顔にとゞく旅店の燈影かな
朝顔やまだ片づかぬ焼け瓦

蘭

蘭の香や異國のやうな三日の月

鬼灯

弟子尼のほゝづき植て置にけり

葛の花

葛の花水に引きずる嵐かな

草の花

露けさや石の下より草の花

稻

四五本の稻もそよく穂に出てぬ

勸農詞の末に

今年米

今年米親といふ字を拜みけり

落穂

日本の外が濱まで落穂かな

蕎麥 信濃では月と佛とあらが蕎麥

茸 鶏のかき出だしたる茸かな

唐辛子 山陰や山伏村の唐がらし

菊 ふる郷や菜に引そへる菊の花

勝菊や力み返つて持つ奴

勝菊は大名小路戻りけり

負け菊をひとり見直す夕べかな

菊垣にちよいとさしたり小脇指
菊園や女ばかりが一床几
菊園や歩きながらの小盃
今の世や菊も賣らるゝ評判記
大菊や今度長崎よりなどと

柘榴 くれなるの舌を卷たる柘榴かな

落椎 落椎のあくまで濡れし朝日かな

團栗 團栗やころり子供のいふなりに

橡の實 橡の實や幾日ころげて籠まで

栗 大栗や栗の中にも蟲の住む
しば栗の獨りはぢけて居たりけり

柿 庵の柿なり年もつもをかしさよ

夢にさと女を見て

頬ぺたにあてなどするなり赤い柿

紅葉 大寺の片戸さしけり夕紅葉

ゆく秋 からくと貝殻庇秋過ぎぬ

ゆく秋やどれもへの字の夜の山
徂く秋を尾花もさらばくかな

冬

木 枯

木枯や壁の際なる馬の桶
木がらしや小溝にけぶる竹火箸
木がらしや鎌ゆひつけし竿の先
木がらしや菜葉ならべる煙草箱
木がらしや護持院原の甘酒屋
冬 枯
冬枯や鹿の見て居る桶の豆
冬枯や神馬の漆はげて立

霜 枯

霜枯や路通乞食に笠かさん
霜枯や壁のうしろは越後山
霜枯や胡粉のはげし土團子
霜枯や鍋の炭かく小傾城

小 春

降る雨も小春なりけり知恩院
棒先の紙もひらく小春かな

時 雨

初時雨俳諧流布の世なりけり
桃青靈神託宣に曰くはつ時雨

義仲寺はあれに候はつしぐれ
やあ暫らくこほろぎ黙れ初時雨
はつ時雨夕飯買ひに出たりけり
番町や最會番屋の北しぐれ
時雨るゝや軒にはぜたる梅もどき
時雨るゝや迎に出たる庵の猫
時雨るゝや親椀たゝく啞乞食

芭蕉塚

時雨れこむ角から二軒目の庵

上野の麓に庵を結びて、一句

寒

身にしむや元の主の寒さまで
井戸にさへ錠のかゝりし寒さ哉
かけ金の真赤に鋪びて寒さかな
死にこぢれくつゝ寒さかな
寒さにもなれて歩くや信濃山
一文に一つ鉦うつ寒さかな

旅二句

一人と帳面につくさむさかな
次の間の灯で膳につく寒さかな

霜

おのが姿に、二句
ひいき目に見てさへ寒し影法師
ひいき目に見てさへ寒きそぶり哉

小松菜の一文把や今朝の霜

善光寺にて、一句

朝霜やしかも子供の御花賣
霜の夜や横町曲がる迷子鉦
置く霜や白きを見れば鼻の穴

氷

せゝなぎや氷をはしる炊ぎ水
我が家の一つ手拭氷りけり
繩附けて子に曳かせけり丸氷

雪

初雪のふはくかゝる小鬢かな
はつ雪や松にかけたる手挑燈
初雪や俵のうへの小行燈
雪の日やふるさと人の不あしらひ
山里や風呂にうめたる門の雪
雪散るやちどけもいへぬ信濃山

雪散るや御駕へはこぶ二八蕎麥
寝ならぶや信濃の山も夜の雪

文化九年郷里に家を借りて、一句

これがまあつひの栖か雪五尺
我が門やこの界限の雪捨場

文化十一年十二月江戸の俳壇を辭す

雪散るやきのふは見えぬ借家札
大門や雪にならべる飴おこし
うまそうな雪がふうはりふはりかな
とる年もあなた任せぞ雪佛

霰

文政二年十月中風にかゝる、病中
稚なりに吹込む雪や枕もと
遠乗や霰たばしる笠の上
霰散れくゝり枕を負ふ子ども

冬 月

冬の月さしかゝりけり後ろ窓
下駄音や庵へ曲る冬の月

寒 月

寒月や喰ひつきさうな鬼瓦

棒突や石にかんく寒の月
寒月やむだ呼びされし座頭坊

雪車
そり負て坂を登るや小さい子

ゑのころも走りくらする小雪車哉

炭
手探りに掴んでくべる粉炭かな

分けてやる隣りもあれなおこり炭

槽火
翁さびうしろをあぶる槽火かな

槽の火や目出度き御代の顔と顔

埋火
埋み火のかきさがしても一つかな

炬燵
づぶ濡れの大名を見る炬燵かな

旅

かう寝るもわが炬燵ではなかりけり

燼開
燼をあけてみてもつまらぬ獨り哉

燼開やあつらへ通り夜の雨

頭巾 横笛や猪首に着なす蒲頭巾

足袋 はく日からはや白足袋でなかりけり

冬籠 雀踏む程 畠あり冬籠

嵯峨山一句

はやくと誰冬ごもる細煙

歸庵

留守札もそれなりにして冬籠

戎講 杉箸で火をはさみけり戎講

十夜 菜畠を通してくれる十夜かな

御取越 とつときの江戸繪屏風や御取越

海鼠 我朝のものとは見えぬ海鼠かな

浮け海鼠佛法流布の世なるぞよ

冬の蠅 冬の蠅逃せば猫にとられけり

歸花 影法師もゆるりとしたり歸り花

茶の花 茶の花に隠れん坊する雀かな

枯菊 作らるゝ菊から先へ枯れにけり

枯葎 枯れむぐらかなぐり捨もせざりけり

大根引 大根引大根で道を教へけり

落葉 山川や落葉の上の筏守

野大根ひき捨てられもせざりけり

吉原のうしろ見よとや散る木の葉
落葉してけろりと立ちし土藏かな
空樋を鼠の走る落葉かな
焚くほどは風がくれたる落葉かな
いる程は手で搔いてくる木葉哉
門畑や猫をじやらして飛ぶ木の葉

冬木立 山寺に豆麩ひくなり冬木立

町中に冬枯れ覆立てりけり

煤掃 わが家は團扇て煤を掃ひけり

庵の煤風が掃つてくれにけり

夕月や御煤の過ぎし善光寺

餅 あこが餅あこが餅とて並べけり

のし餅の皺手のあとは隠れぬぞ

神棚の灯て並べけり餅むしろ

あと白は烏の餅や西方寺
犬の餅烏の餅も搗かれけり

東隣の配り餅つひに來らず

我が門へ來さうにしたり配り餅

顔見世 世の中や皺顔見せに浪花から

掛乞 掛乞に水など汲んでもらひけり

年忘 家なしや今夜も人の年忘

獨り身や上野歩いて年わすれ

年籠 君が世やから人も来て年ごもり

年惜む 日本の年が惜しいかおろしや人

ゆく年 行く年や身はならはしの古草履

行く年や庇の上におく薪

年の暮 流れ木のあちこちとして年暮れぬ

酒 後

手枕や年が暮れよと暮れまいと

兩國橋、一句

年の暮龜はいつ迄つるさるゝ

文政二年五十七齡の暮に

ともかくもあなた任せの年の暮

春

元	日	一	初	春	二	正	月	三	初	空	三		
初	日	三	注	連	飾	四	福	も	の	四	若	水	四
雜	煮	四	年	始	五	福	壽	草	五	初	夢	六	六
吉	書	六	萬	歲	六	風			六	羽	子	七	七
手	毬	七	若	菜	七								
長	閑	七	遲	日	八	水	温	む	八	雪	解	九	九
霜	解	九	春	暮	九	春	月	一〇	春	風	一〇	一〇	一〇

夏

春	雨	二	陽	炎	三	霞	三	雛	四	二	四		
山	燒	二五	種	蒔	二五	畑	打	二五	接	木	二五		
猫	の	戀	猫	の	子	六	鶯	六	雲	雀	七		
燕		七	歸	雁	八	雀	の	子	八	鳥	の	子	九
蛙		九	蝶		一〇	若	草	一〇	木	の	芽	一三	一三
梅		三	柳		三	櫻		三					

更衣……二四
 裕……二四
 佛生會……三五
 藥降……三五

蚤	蛭	蟬	鶉	夏	晝	雲	夏	短	五月
……	……	……	……	花	寢	峯	山	夜	雨
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
筍	子	墓	行	御	汗	川	清	暑	田
……	子	……	々	祓	……	狩	水	し	植
……	……	……	子	……	……	……	……	……	……
牡	蚊	蝸	鴉	時	帷	晒	夕	涼	麥
丹	……	牛	の	鳥	子	井	立	し	秋
……	……	……	集	……	……	……	……	……	……
菖	蠅	螢	火	閑	嘔	振	夏	涼	青
蒲	……	……	取	古	……	舞	月	風	田
……	……	……	虫	鳥	……	水	……	……	……
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……

蓮	晝	若	杜	初	う	秋
……	顔	葉	若	秋	そ	……
……	……	……	……	……	寒	……
夕	茂	卯	花	朝	朝	秋
顔	り	の	……	寒	寒	立
……	……	花	……	夜	夜	……
百	夏	梅	……	暮	寒	冷
合	木	の	……	末	夜	か
……	立	實	……	枯	永	……
茨	瓜	柿	……	……	……	秋
花	……	の	……	……	……	寒
……	……	花	……	……	……	……

秋

草の花	朝顔	蟬	鹿	墓	田	八	稻	七	秋
……空	……空	……空	……禿	……毛	……毛	……禿	……禿	……禿	……禿
稻	蘭	鱒	蛇入穴	燈籠	角力	砧	待宵	露	秋風
……空	……空	……空	……禿	……禿	……毛	……禿	……禿	……禿	……禿
今年米	鬼灯	芒	秋蟬	送火	盆	案山子	月	霧	秋雲
……空	……空	……空	……空	……禿	……毛	……禿	……禿	……禿	……禿
落穂	葛の花	萩	菘	雁	迎鐘	鳴子	踊	秋雨	天の川
……空	……空	……空	……空	……禿	……毛	……禿	……禿	……禿	……禿

冬

雪車	雪	時雨	木枯	栗	柘榴	蕎麥
……禿	……禿	……禿	……禿	……禿	……空	……空
炭	霰	寒	冬枯	柿	落	茸
……禿	……禿	……禿	……禿	……禿	……空	……空
楮	冬	霜	霜枯	紅葉	團栗	唐辛子
……禿	……禿	……禿	……禿	……禿	……空	……空
埋火	寒	氷	小春	ゆく秋	橡の實	菊
……禿	……禿	……禿	……禿	……禿	……空	……空

炬	燧	爐	開	頭	巾	足	袋
冬	籠	戎	講	十	夜	御	取
海	鼠	冬	の	歸	花	茶	の
枯	菊	枯	葎	大	根	落	葉
冬	木	煤	掃	餅	親	見	世
掛	乞	年	忘	年	籠	年	惜
ゆ	く	年	の	暮	年	の	暮

信道會館ハ明治二十四年初代近藤友右衛門翁ノ創建スル
 トコロニシテ淨土真宗ノ教場タリ當代ニ至リ時代ノ進運ニ
 應ミ佛教各宗ニ開放シテ教化求道ノ道ヲ拓キ財團法人信道
 會館ト改メ專ラ現代ノ名師高德ヲ招聘シテ日曜講演ヲ開筵
 シ以テ大乘佛教ノ普遍徹底ニ努ム
 願レバ年ヲ閉スルコト四十有五年同信ノ人次第ニ其數ヲ
 増シ敬虔ノ念日々ニ醇キヲ加フルハ恭慶ニ堪ヘサルトコロ
 ナリ
 道般乏クモ多年ノ教化事業ヲ闡彰セラルルノ榮譽ヲ荷ヒ
 愈々同信協力シテ朝家法輪ノ興隆ニ資センコトヲ期ス冀ク
 ハ江湖ノ諸彥斯ノ使命ヲ達成セシメラレシコトヲ

5L-19

刷印日三月七年十和昭
行發日七月七年十和昭

無斷轉載之禁

名古屋市中區南伏見町二丁目

法人 信 道 會 館

名古屋市中區千早町五丁目

株式會社 一 誠 社

名古屋市中區南伏見町二丁目

發行所 信 道 會 館

電話 2072
振替口座 2114

終